

就職

林芙美子

青空文庫

何をそんなに腹をたててゐるのかわからなかつた。埜子は松の根方に腰をかけて、そこいらにある小石をひろつては、海の方へ、男の子のやうな手つきで、「えゝいッ」と云つては投げつけてゐた。石は二三間位しか飛ばないで、その邊の砂地の上へ濕つた音をたてておちてゐる。

冬の濱邊は、時々遠くの方から、ごおつごおつと風を卷きたててゐた。空には雲の影もないのに薄陽が針をこぼしたやうに砂地にやはらかい光をおとしてゐる。埜子は急に砂地の上へ轉び、犬のあがきのやうに、乾いた砂地をごろごろ轉げてみた。砂は襟の中や、袖や、裾から埜子の熱い軀に觸れてくる。埜子は汗ばんだ肌へ少しづつ砂がはいつてくるのが氣持がよかつた。しまひには、胸をひろげて、乾いた砂を胸へすくひこんでゐる。砂は汐臭い海の匂ひがしてゐた。兩手に砂をすくつてシャワーだと云つて裸の膝小僧にもふりかけてみた。時々、小人島の風のやうなあるかなきかの龍卷が、埜子の頬へ砂風を吹きつけてくる。膝小僧の上の砂もさらさらと風に吹き散らされて、柔らかい、まるい膝小僧が薄あかく陽に光つてゐる。

埜子は急に砂の上に立ちあがつた。背中にも胸にも砂がざりざりしてゐる。埜子は髪が

毛をゆすぶり、頭髮の砂をはらひおとすと軀ぢゆうの砂だけは一粒でもおとさないやうにと、息をつめて家へ走つて行つた。

埼玉が變な恰好で濱邊から走つて來るのを、二階のサン・ルームから眺めてゐた謙一は、急いで梯子段を降りて行つてみた。

「埼玉ちゃん、どうしたんだい、頬つぺたなんかふくりましたりして……」

縁側へ謙一が出てゆくと、埼玉はいまにも、嘔吐のきさうな變な様子をして、謙一に

「早く、早く……」と云つた。謙一はどうしていゝかわからないので、座敷へ走りこんでゐる埼玉の後から急いでついていつてみた。埼玉は座敷へ這入ると、謙一をふりかへつて、しばらくちつとみつめてゐたけれど、急に羽織をぬぎ、足袋をぬいで、ぱつぱと軀を激しくゆすぶつてゐる。衿や、袖や、胸にたまつてゐた砂が、ざらざらと新しい畳の上に落ちこぼれた。

「どうしたんです？」

「あのねえ、あなたにお土産を持つて來たのよ……」

埼玉は自分で軀をゆすぶりながら青くなつてゐた。謙一は呆れて埼玉をみつめてゐる。

埼玉は帶をといた。そして、帶をそこへときすてたまゝ自分の部屋へ走つて行つた。謙一

は疊の上の砂を眺めてゐたが、急に、熱いものが胸に沁みてきた。埼玉子の淋しさが、昨日からの自分を責めてゐるやうにもとれる。謙一はさつき濱邊まで埼玉子を探しに行つたのだけれど、埼玉子を探すことが出来ずに戻つてきたのであつた。謙一はしばらく座敷へつゝ立つてゐたが、心のうちでは、埼玉子へ對する激しい愛慕の氣持がつきあげてきてゐた。

謙一は埼玉子の部屋へ行つてみた。埼玉子はもう洋服に着替へて濡れ手拭で顔を拭いてゐる處だつた。

「ねえ、ごめんなさいね……」

「……………」

「怒つた？」

「何を怒ることがあるんです？ 怒ることなんかありやアしませんよ。——さつき、僕も濱に行つてみたんだけど……」

「さうお、私ずつと遠い處へ散歩に行つてゐたの……」

埼玉子は鏡の中の謙一にふふと笑つてみせた。謙一は急に蹲踞んで、埼玉子の肩を抱き埼玉子の額に接吻をした。埼玉子は濡れ手拭を持つたまゝ、しばらく謙一の胸に凭れてゐたが、急に身を起して、

「厭よ！ 厭だア、あつちへ行つてよ、謙兄さん大嫌ひだ、大嫌ひ！」

と、鏡の中の謙一へ濡れ手拭を投げつけた。さうして立ちあがると、壁へ凭れて、

「新京でも、何處でもいらつしやい。どうして、勝手に一人でそんな處をきめてしまったのよ。——新京なんて、そんな遠い處へ何故行かなくちやならないの？ 新京なんかへ行

くために、謙兄さんは大學へ行つてたのツ？」

埜子は一氣にまくしたててゐる。謙一は黙つてゐた。小柄で顔の小さい埜子が、まるで謙一には女學生のやうに見えた。二十一の女とはどうしても思へない。

「莫迦だなア、埜ちゃんだつて、新京へ遊びに来てくれればいゝぢやないか、何も一生逢へないつて云ふンぢやないでせう？」

「だつてどうしてそんな遠い處へ職業を選んだりするのよ。——お姉さんが遠くへ行つちまつたからでせう？ 私なんかのことなんか謙兄さんが考へてゐるなんて思はないわ。私は、とてもそれが癪にさはつてるのよ。……」

急にけたゝましく、机の上の時計の鈴が鳴りはじめた。埜子は、腹立たしさうに時計をつかんだ。謙一は埜子の狂人じみた様子に吃驚して、ぢつと埜子を眺めてゐる。埜子は窓を開けると、鈴の鳴つてゐる時計を庭へ投げつけた。開けた窓から寒い風が吹きこんで、

遠雷のやうな海鳴の音がきこえてくる。

謙一は廊下へ出て行つて、庭に投げ捨てられた時計をひろひに行つた。全く、埜子が云ふまでもなく、新京なんか就職をしようとは、一週間前までも自分は考へてはゐなかつたのだ。學校を出たら、東京に勤めるものとはばかり考へてゐたし、現に、自分も學校の就職係には、東京電燈とか、三井、三菱なんか履歴書を出しておいたのであるけれども、謙一は、急に、それらの就職口をとりやめて、自分だけ新京の××製鋼會社へ就職することになつたのである。

青年の氣まぐれとは云ひきれない、何かしら、鬱勃とした思ひが謙一の若い心をかりたててゐたのだ。狭い日本の内地で、小さい椅子にしがみついてゐるよりも、遠い處へ行つて、思ふぞんぶん働いてみたい、と思つてゐた。新京は純粹な新興都市であり、この戦時下にもりもり發展しつゝある製鋼事業は、若い謙一に働く魅力を感じさせた。

急に、新京へ職がきまつたことを、埜子の兩親に打ちあけた時、流石に埜子の兩親は驚きもし、そんな遠い土地へ行かうとする謙一の氣持を不思議がつてもゐた。

謙一が、時計を埼玉子の部屋へ持つて行つてやると、埼玉子は、人がかはつたやうに、謙一から時計を静かに受取つて、ゆつくりゆつくり時計のネヂを巻いた。

「僕が新京へ行く氣持になつたのは、カツ子さんなんかのことぢやないんですよ。そりやア、僕はそのひとは好きだつたし、結婚出来れば結婚もしたかつたけれども、もうあのひとも結婚して行つちまつたし……僕は、いつまでもカツ子さんのことを考へてゐる譯にもゆかないぢやありませんか？ 遠い處へ職を求めたと云ふのは僕は本當は東京がきらひになつてゐるんですよ……生れ故郷の東京を去るなんて云ふのは、埼玉ちゃんには理窟がわからないだらうけれど、兎に角、僕は一度、東京を離れてみたいんだ。そして、新しい發展性のある土地で働いてみたいと思つただけ……僕は東京は本當は厭なんだ！」

「ぢやア、私もきらひなのね？」

「うん、そりやア……困つたなア、僕は埼玉ちゃんが好きだよ、とても好きなんだけれど、東京が厭になつた氣持の中には、埼玉ちゃんなんか何の關係もないし、これは、埼玉ちゃんにはうまく説明出来ないと思ふけど……男がね、一生の仕事をきめると云ふ時には、そんな、女の問題や色々な人情とは、また違つたものがあると思ふんだけど……新京つて、現在で

は少しも遠い處とは思はないし、埼ちゃんなんか、いつでも來て貰ひたい位だ。——僕は、のびのびした處で働きたいんだよ。だから氣持よくやつてくれるといふな……」

埼玉子は黙つてゐた。

こんな立派なひとが遠い處へ行つてしまふ……厭々、どうしても厭だ。埼玉子は黙つたまゝ、謙一を睨むやうに見上げてゐた。肩ががつしりしてゐて、大きなロイド眼鏡の奥の眼は、人なつこく、いつも空間をみつめてゐたし、顎の張つたところは、謙一の強い意思を現はしてゐて埼玉子はとても好きだつた。——このまゝ別れるにしても、額に接吻をされただけで別れるのは埼玉子には心残りだつたし、もう、二人きりでゐると云ふのも今日かぎりだと思ふと、埼玉子は、さつきのやうに焦々して砂に轉げてみたくなるのであつた。——夕方の汽車で母たちがやつて來ることになつてゐる。朝の汽車で謙一と二人だけで先發してこの千葉の別荘へ來たのが、無意味のやうに思はれてくる。風呂場の裏では別荘管理の百姓爺さんが鶏を締めて焚火で毛焼きをしてゐた。

「もう、明日、お別れね？」

「うん……」

「ごめんなさいね？」

「何も、あやまることはないぢやないの。僕だつて、埼玉ちゃんには色々お世話になつたんだから……感謝してゐますよ」

六時頃、埼玉の母たちが來た。中堀や櫻内も一汽車遅れてやつて來た。母は埼玉の小さい弟たちを二人も連れて來たので、淋しい別荘にはちぎれるやうに賑やかになつた。軀の弱い埼玉が、秋からずつとこの別荘に養生に來てゐて、珍しく一週間ほど東京へ戻つてゐたのである。今朝も、謙一と連れだつて兩國から汽車に乗つただけけれど、埼玉は、あわただしく東京で謙一と別れたくはなかつたのだ。千葉の家で、謙一の送別會をしようと云つて、忙しい謙一を無理矢理に埼玉がさそつたのであつた。

「おや、犬でも上つたのかしら？ お座敷に砂がいつぱいよ……」

埼玉の母は、座敷に散らかつた砂を見て、臺所へ箒を取りに行きながら、

「埼玉さん、お座敷の砂はどうしたのよ？」

とたづねてゐる。埼玉は謙一と顔を見合はせてくすりと笑つた。中堀も、櫻内も、海を見るのは久しぶりだと、寒いのに庭の垣根に凭れて海を眺めてゐた。謙一だけが背廣姿で、中堀も櫻内も學生服だつた。

「さア、皆さん、寒いからお座敷へ這入つて下さい。お火鉢が出てゐますよ……」

座敷はきれいに掃かれて、近所から寄せあつてきた座蒲團が並び、母は火鉢に大きな鍋をかけてゐる。

「おい、おい。こつちへお這入りよ、風邪ひいちまふぜ……」

謙一が埼玉の弟の喬を抱いて、縁側から垣根のところにある二人を呼んだ。埼玉は黒いリボンで頭髮を結んで、洋服の上から派手な錦紗の羽織を引つけてゐた。京都人形のやうに沈んだ顔だちで、皮膚の薄いのが、妙に痛々しくみえる。

中堀や櫻内が部屋へはいつて來ると、埼玉はわざと、この二人の大学生の間に坐つた。謙一は、自分のそばには坐らないで、向ふ側に、にこにこして坐つてゐる埼玉を見ると、かへつて吻つとしたやうな氣持になつてゐる。

「櫻内さんは何處へおきまりになつたの？」

「何です？ 勤めさきですか？」

「えゝ」

櫻内は鹿兒島の生まれで、鹿兒島の言葉の訛がなかなか抜けないらしく、妙にどもりながらしやべつてゐた。

「八幡の製鐵所へ勤めることになりましたけどねえ、誰つちや知つたひとがをらんで、淋しかです……」

「まア、八幡へいらつしやるの？　中堀さんは何處？」

「僕は滿鐵の方で吉林へ行きます。随分遠いんですが、清水が新京へ行くんで、時々逢へると愉しみにしてゐますよ……」

「まア遠い處へいらつしやるのねえ、謙一さんが新京へいらつしやつて、随分遠い處だとおもつてゐたのに、中堀さんはまだ遠いのね……」

鍋のなかの鶏や野菜が煮えはじめた。謙一は喬に少しづつ鍋の中のをよそつてやりながら、喬を抱いた膝をびくびくと動かしてゐる。櫻内は五分刈りで精悍な軀つきであつたが、臉がはれぼつたく、笑ふと大きな八重齒が出て子供らしい表情になつた。中堀はまるで市役所の官吏にでもなつた方がいゝやうな物靜かな恰好で、頭髮もきれいなでつけて、制服のカラーも清潔にしてゐた。色があさぐろく、大きな鼻がいかにも好人物を示してゐる。中堀は風邪をひいてゐるのか、時々咳をしてゐた。

「もう、來年は、みんな遠くへ行つちまふのね……」

埜子が不器用な手つきでみんなにビールをつぎながら云つた。櫻内だけはビールよりは

酒がいゝと云ふので、別荘管理の爺さんに頼んで地酒を買つて来て貰つておいたのだ。八時過ぎには木更津の驛に勤めてゐると云ふ謙一の友人の延岡もやつて來た。謙一とは木更津の中學時代の同窓生だとかで、延岡はがらがら聲で無遠慮にしやべる男だつた。平凡な驛員型の人物であつたが、話が率直で面白いのでみんな好意を持つた。延岡は羽織の下に地味な袴をはいてゐる。

「清水は、新京へ行くんだつて？ 羨ましくて仕方がないなア：：僕ももう何處か遠い處へ行きたくなつた。清水のやうに大學卒業でもあれば、どつか素晴らしい處へ、就職の方法もあるんだが、何しろ中學卒業ではどうにもならん」

延岡は段々酔つて來ると、保線に勤めて、土方のやうなことをしてゐる俺だけれど、そのうち素晴らしい仕事を探すのだと云つて、一人で瘦せたこぶしを膝の上で握りかためてゐた。自分だけがいまにも大きな出世を試みせるぞと云つてゐるやうな、田舎者の無遠慮をまるだしにしてゐる延岡に、櫻内は段々不快なものを感じてきて、急に黙りこんで酒をあふつてゐた。

「まア大學を出た處で、君たちはこれからが大變だぜ、いままでは學校の思想の枠の中で、メリーゴーラウンドしてゐればよかつたのだが、我々若いものは、我々若い者だけの思想

をつかまなければいけないねえ。自力で思想をつかむことが大切だ……」

「へえ。自力の思想を持つてゐると云ふのは君一人とでも云ふのかね？ 君の思想とはどんなものだい？」

櫻内は青くなつて、腫れぼつたい眼を細めて、じつと延岡を睨みつけた。その表情の中には、何かしら勃勃とした怒りが走つてゐる。

埼玉の母は二階に學生たちの寢床を敷いておくと、眠さうな喬を引きとつて、さつさと埼玉の部屋へ引きさがつてしまつた。謙一は、いまでは、延岡の訪問を後悔してゐるやうであつたけれど、二人の話の途中にはいるのも自分が弱いやうで、しばらく黙つてゐた。

おとなしい中堀がふと、何氣ない風で、

「君はそんなに學問と云ふものに憧憬してゐるのかね？ 學校の思想の枠の中でメリーゴーラウンドしてゐるとはどう云ふ意味かわからんけれど、今夜はまア清水君や僕たちの送別の宴なのだから、むづかしい話はよし給へ！」

「あつはツはツ……むづかしい話かねえ？ これが……」

延岡はいかにも愉快さうに大笑しながら、箸を煮えつまりかけてゐる鍋の中へつゝこんだ。すると、櫻内は急に大きな聲を出して、

「莫迦野郎！ いったい誰を侮辱してゐるんだツ！」

と、延岡のつき出してゐる手の箸を引つたくつて硝子戸へびしやツと投げつけた。箸をとられた延岡は、むくつと立ちあがつた。立ちあがるなり目の前にあるビール瓶をつかんで、櫻内の顔をめがけて力いっぱい投げつけた。軀をかはした櫻内が、疊にうつぶすと、瓶が床の間の壁へぶしりと響いたのと同時だつた。顔をあげた櫻内は、ビール瓶で鼻でも打つたのか、唇や顎の邊へ鼻血が吹きこぼれてゐる。一瞬の出来事だつたので、謙一も中堀も埒子も呆氣にとられて息を詰めてゐた。

櫻内は右手で鼻血をこすると、すぐ延岡の胸倉をつかんで、縁側の硝子戸を引きあげて、砂地の庭へ飛び降りて行つた。二三度、烈しい頬打ちの音や、烈しくつかみかかる軀の音がした。海の音がかうがうと響いてゐる。

「おい！ もういゝよ、やめろよ……」

中堀が縁側へ出て行つたが、二人は固く組みあつて砂の上をごろごろ轉げまはつてゐた。謙一も縁側に出て行つたが、黙つてつゝ立つて二人の喧嘩を、ぢつと眺めてゐた。——就職したよろこびの底には、學生生活を離れて遠くにちりぢりになつてゆく一抹の淋しさが、誰かに甘えたいやうなやるせなさで、この一ヶ月あまり、自分たちの氣持を焦々さしてゐ

たのだ。櫻内が力いつぱい戦つてゐる姿は、謙一には色々ななごりの反射を浴びてゐるやうで見てゐて爽快だつた。喧嘩になると、鹿兒島生れの櫻内は唐手の選手なので、延岡は敵ではなかつた。二三度揉みあふうちに、延岡はすぐ櫻内の下敷になつてうんうん胸を締めつけられてゐる。

「おい櫻内！ もういゝよ、やめ給へツ」

中堀が下駄をつゝかけて庭へ降りて行つた。延岡は湧やよだれをづるづる出して、齒ぎしりをして唸つてゐる。

「へつぽこ大學生に負けてたまるものか！」

延岡は締めつけられながらも、まだ毒づいてゐた。謙一はそれを聞くと、急に沓下のまゝ庭へ飛びおりて行つて、二人の間を引きはなすと、

「延岡！ 貴様歸れ！」

と、大きい聲で呶鳴つた。立ち上つた延岡は胸をはだけで、唇尻には少し血がにじんでゐた。酒臭い息を吐いてしばらく櫻内を睨んでゐたが、そのまゝ延岡は庭の外へすたすたと跣足で出て行つてしまつた。

「あら、あの方、帽子があるわ……」

埒子が帽子を持つて來たが、誰も帽子を持つて行つてやるものはなかつた。

「生意氣な奴だ。どうしてあんなのを呼んだんだ？」

櫻内が謙一に詰問してゐる。埒子の母が驚いてわくわくしてゐたが、すぐに雑巾を持つて來て謙一にわたした。謙一は雑巾を櫻内に取つてやつて、自分は沓下をぬいで座敷へ上つた。やがて、遠くの濱邊を歸つてゆくらしい延岡の歌聲が、風に吹き消されるやうに小さくかすかにきこえて來た。

「いゝ人物なんだがねえ、田舎にゐると、意識過剰になつて、あんなに妙な人物に風化されてしまふんだよ……」

「何か知らんが妙な奴だねえ、いやに年寄くさくて、自分はいつぱしの苦勞人だと云つたやうな、あんな態度は男らしくないよ。いくつなんだい？」

「二十五だつたかな、ひがみの強い奴だなア、あんなだとは思はなかつた……社會へ出たのは俺が先輩だぞとよく云つてゐたが、あんなに單純な奴とは思はなかつた……僕たちだつて、遠い土地へ行つて、いつとき會社勤めをしてゐたら、あんなにうすぎたない氣持になるんぢやないかな……」

「酒癖はよくないねえ……」

「うん、酔はないと、中々面白い。それこそかどのとれた圓満な男なんだがね……」

「驛へ勤めてゐるのは結構ぢやアないか、自分で卑下して、人にからんでくる奴は厭だねえ……」

○

翌朝、埴子は二階の狭いサン・ルームで日光浴をしてゐた。背中を陽にあてて籐の寢椅子に半裸體の姿で横になつてゐた。そして靜かに本を讀んでゐる。昨日のさうざうしい青春の波は、窓の向ふの波のやうに非常に靜かにおだやかになつてゐる。——ライン河畔のリューデスハイムの町から、下流に下つてゆく白い遊覽船に、三人の青年と三人の娘の一组が乗つてゐた。この一組は學生劇の連中で、ラインの上流をたつた六人で芝居をうつてまはつたけれどいづれも不入りで、リューデスハイムの町へ泊つた時には、宿賃だけでパンを食べることも出来ない貧しさであつた。その時、宿屋の庭に馬に乗つて來た老紳士が、此の悄然たる若者たちを氣の毒がつて、下流の賑やかなケーニヒス・ヴィンターの町や七ツの山の見えるノンネンベルト島なんかへ案内をしてくれる。金持の老紳士は三人の女の

なかの、ゲンマと云ふ娘に愛慕の氣持を持つてゐた。下流の町に着くまで、ゲンマは老紳士を思ひ悩みつゞけるけれども、最後はその老紳士の愛をしりぞけて、不安と缺乏の人生に向つて、そして何よりも尊い青春に向つて、三人の青年のなかのガイエルと港の町へ上陸してゆく……。—— 埴子はシュミットボンの「山の彼方」を讀んで了つてから、しばらく渦巻くやうな様々なおもひで、本の上に顔をのせてゐた。顎の下に本の白い頁があつたけれども、その白い頁の活字の中から、冷くて底深いラインの流れが悠々と流れてゐるやうに空想された。まるで、自分が作中のゲンマのやうな娘になつたやうにも考へられて來る。この小説の中の青年や娘たちは、不安と缺乏の人生に立ちむかつてゆく勇ましい元氣があるのだ。それなのに謙一だの自分達の周圍はいつたいていどうしてこんなに昏いのだらう……。食ふることや、生活にはどうやら困らないでゐられるけれども、四圍のすべては老人臭くてごみごみしてゐて、あんなに、どの學生も職業探しに血まなこになつてゐる……。二度と再びめぐつて來ない青春すらも、押しかくしてみんな殴りあつては生きてゐるのだ。

埴子は、この海邊の別荘で、何年生きられるのかもわからなかつたけれども、何かしら、この世に生を受けて生まれて來たそのことが、悲しく切なく感傷的になつてきてゐた。

「這入つていゝ？」

「誰なの？」

「僕……」

「這入つていゝわ……」

謙一は満ち足りた眠りから覺めた明るい顔色で、のつそりとサン・ルームへ這入つて來た。

「だいぶ狐色に焼けたのね？」

「私の背中、いゝ色でせう……」

謙一はまぶしいものでも見るやうに、埼玉の背中を眺めた。焼きたてのパンのやうにふつくらしてゐる。背筋の溝の線も健康さうだった。肩の肉づきは子供のやうに薄くて、とがつたやうな左の肩さきに、陽がきらきら射してゐる。窓硝子の向ふには、白く陽に反射した海が見えた。

「謙一さんは、いつまた東京へくるの？」

「さうね、一週間ぐらゐしてかな、向ふへ行くのは二月の末か三月の始めだから、まだ、度々こゝへはやつて來ますよ……」

「やつてこなくてもいゝわ」

「どうして?」

「どうしてでも……あなたは、自分でどんな何でもおやりになれるし、ちゃんと方向がきまつてゐて安心ぢやないの? 私は、もうこゝで死ぬる日を待つてるだけだもの、来てくれなくつてもいゝの……」

「このごろ、埼玉ちゃんは、どうかしてるよ。どうしてそんなにひがみが強くなつたのかな?」

「失禮ね、ひがんでなんかゐないわ……」

埼玉は藤椅子から起きあがつて、乾いたタオルで胸や腕をこすつた。兩の乳房が、小学生の子供のやうに小さい。謙一は卓子の上の、もひとつのタオルで埼玉の背中をこすつてやつた。

「カツ子姉様はともふとつてたわね?」

「……」

「今日はもう、カツ子姉様の話をしてもいゝわ。みんなもうよそのひとなんだから……」

埼玉はオレンジ色のブラウスを着て、胸の黒い釦を一つづつはめながら、

「櫻内さんたちどうして?」

ときいた。

「さつき、中堀と爺やさんの案内で濱へ地引網を見に行つただけ……」

「さう……あの櫻内さんで、とても元氣な方ねえ、八幡の製鐵所へいらつしやるつて向いてると思ふわ。——みんな大學を出て、職がきまつて、戀もしないでお嫁さんを貰つて、赤ちやんが出来て、平和に一生を送るのね？」

「それでもう澤山ですよ……埼ちやんは、頭の中だけで色々なことを考へて、一人で人を罰したり、人を讃めたりしてゐる……人間らしい生きかたと云ふのは、結局は平凡な生涯にあるんじゃないかな……埼ちやんはあんまり小説類を読みすぎるね。あんたは病氣なんだから、病氣に勝たなくちやいけない。やつぱり、規則正しく日光浴をして、散歩をしたり、おいしいものをたべたり、いまのところ、香氣にそんなことをした方がいゝと思ふんだけど、埼ちやんが焦々してゐると、みんなが焦々しなければならぬもの。僕は、昨日、埼ちやんが砂を運んで来てくれただらう。あんな無邪氣な埼坊が好きだなア、——就職をして、お嫁さんを貰つて、平和に生涯を終ることが出来たら結構だと思つてゐるんだ……」

「おゝ厭だ。そんなしみつたれた若さだの、しなびた青春なんてきらひだわ……」

「しなびた青春か……さうかなア。青春と云ふものは、一々大芝居をしてみせなきやなら

ないものとも違ふし、環境によつて、貴族の青春もあるだらうし百姓の青春もあるだらうし、僕たちのやうなサラリーマンの青春だつてあるんだ。埼玉ちゃんが讀んでゐる小説の青春は、それはその作家の描いた芝居であつて、現實の世界に、これが僕たちの青春でございと金看板はさげられないぢやないの？ 青春の氣持なんかはその人々で生涯持つことも出来るだらうし、僕は平凡に就職して、親爺やおふくろによるこんで貰ふことで満足だな

……」

「……………」

「埼玉ちゃんに云はせると、與へられた職なんかも時には放つたらかして、一人の女を熱愛することが青春なんだらうけど、それだつて結局はたかが知れたものだ……」

謙一は窓邊に行き、窓を開けて海を眺めてゐた。海の色は段々青く染まつてきてゐる。空には小さい白雲が吹き流れてゐた。

「そりやア謙一さんは、長生きをする方だからそんなことが云へるのよ。私は、……私は、いつ死ぬるかもわからないんですもの……」

「何を云つてるんだ。病氣なんかに負けちゃいけないときつき云つたでせう……少しのんびり保養をしてゐたら、埼玉ちゃんなんか若いのだから、すぐカツ子姉さんみたいにもりも

り大きくなるんだよ……」

謙一は病氣と闘ひながら、この淋しい海邊で暮してゐる若い埼玉子が可哀想でならなかつた。

謙一は埼玉子の家とは遠縁にあつてゐて、早稻田にはいつた時から、ずっと埼玉子の家に下宿をしてゐた。謙一は埼玉子の姉のカツ子が好きで、大學を卒業して職につくことが出来たら、カツ子を妻に貰ひたいと考へてゐたのだ。

だけど、カツ子はいつの間にか平凡な見合ひをして地味な商家へとついで行つてしまつた。

掌中のものを盗まれたやうに、一時は氣拔けがして呆やりしてゐたけれど、謙一はすぐ立ちなほることも出来たし、また、以前のやうな規則正しい學生生活を取り戻すことも出来てゐた。

謙一とカツ子のあひだの、かすかな思慕の流れを、埼玉子はいつの間にか鋭敏に感じてゐて、ちやんと知つてゐた。その鋭敏さは、むしろ病的な位に「何か」をつけ加へて大きく考へてゐるらしい様子でもある。

カツ子のやうにふとらなくてはいけないと云ふと、ふつと埼玉が黙つてしまつたのを、謙一はまた溜息をつきながら反省しなければならぬ。

「僕は、そのうち、もう一二度、千葉へ來ますよ、埼玉ちゃんには、まだまだ、いろんな話をしたいと思つてゐるんだ。——カツ子さんのことに就いては埼玉ちゃんが考へてゐるやうな重大なことは何もなかつたんだし、僕にはそんな烈しいことは何も出來ない。カツ子さんも埼玉ちゃんが知つてゐるやうに、中々堅實な地味なひとなんだし、いまはむしろ、僕は埼玉ちゃんをお嫁さんに貰へれば貰ひたい位に考へてゐるけれど、僕には職業を捨ててしまつて埼玉ちゃんのそばにつききりでゐられる自由もないのだし、……結局は、埼玉ちゃんが軀をよくして、滿洲へ來てくれることだな……男は、功利的な意味ではなく、職業の爲には折角の戀愛も捨てなければならぬ場合もあるんだ。わかるかなア……僕は今どんな素晴らしい戀をしてゐても、どうしても新京へ行つてしまふだらうし、新しく仕事に出發してゆく氣持は、現在の僕にとつては何ものにも替へがたい……」

埼玉は黙つてゐた。明るい陽が疊いっぱいに射して、謙一の影が肥えた僂儂のやうに疊にくつきりと寫つてゐる。

「だから、もういゝのつて云つたでせう？ 私は新京なんかに行けやしないわ……私だつ

て、私の生活があるんだし、もう、このまゝお別れでいゝと思ふの。私は病氣なのだもの……」

謙一は誰かに呼ばれたやうな氣がして、くるりとふりかへつて濱の方を眺めた。延岡が青い顔をして垣根の外に立つてゐた。

「どうしたんだ？」

「昨夜、驛の前の宿屋に泊つたんだ……帽子を忘れて取りに來たんだよ」

「まあ、這入つて來いよ……」

謙一は眼鏡をずり上げてすぐ階下へ降りて行つた。埜子は、籐椅子から降りて窓邊にゆき、小さい聲で歌をうたつてみた。あの波も、あの空も一瞬のながれであり、すべては木ツ葉微塵だ。謙一の新しい出發に對して、狭い女の嫉妬が自分を苦しめてゐる。自分は謙一を奪ふことが出來ない。男の仕事と云ふものは、そんなに男にとつて魅力のあるものだらうかしら……。自分は、これからも、この濱邊で暮さなければならぬし、病氣に脅かされて、毎日、不機嫌に暮さなければならぬのだ。

人間の生活とはいつたい何だらう。……人間が生活々々と呼んで生活へ進んでゐるその「生活」とはどんな生活なのだらう。

埼玉は皮膚をかきむしられるやうに耐へがたい氣持だつた。

濱邊を點のやうになつて、櫻内や中堀たちが戻つて來てゐる。埼玉は窓から白いタオルを振つた。櫻内も中堀も馳け足で戻つて來てゐた。（あゝ、あの人たちもこれから新しい生活へ進んでゆくのだわ……）埼玉はハンカチを振りながら、明日から自分だけが、またこの海邊にのこつてゐるのだと思ひ、妙に感傷的になつてゐる。

「ぢやア、さよなら、下駄は驛の前で買ったんだよ……」

「あゝさうか。東京へもやつて來いよ……」

「うん、また、君が新京へ行くまでには、一度、たづねてゆくよ……」

垣根の外へ、延岡の鼠色のソフトが見えた。延岡は一度もふりかへりもしないで、生垣に沿つて、櫻内とは反對側の方を歩いてゐる。

海が急に昏くかげつて、風が出はじめたのか、まるまつた新聞紙が、垣根のそとを石崖の方へ風に吹かれて行つた。

青空文庫情報

底本：「悪闘」中央公論社

1940（昭和15）年4月17日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※疑問点の修正に当たっては、「林芙美子全集 第十五巻」文泉堂出版、1974（昭和52）年4月20日発行を参照しました。

入力：林 幸雄

校正：花田泰治郎

2005年6月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

就職

林芙美子

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>